

小説における視点と時制： 日英時制体系における“参照点としての発話時”

山内 真理

1. はじめに

英語の小説でも日本語の小説でも、作中で起こる出来事を描写するための時制は基本的には過去形である。これはもちろん、作中で描かれる出来事が、実際に作者からみて過去に起こったことだからではなく¹⁾、小説（特にその典型的な形である3人称小説）が、「虚構上の“語り手”が、“すでに起こった出来事”を、虚構上の“対話相手”に伝える」という様式をもっているからである²⁾。この点では両言語とも同様であり、日本語と英語の翻訳版を比べたとき、次の(1a)(1b)のように、全体が過去形で描写されている相当箇所を見つけることも難しくない。

- (1) a. この問答の最中に、鳥飼重太郎は、そっとその場をはずした。彼は、古帽子をつかむと、音のせぬように部屋を出て行った。

彼は表へ出ると、市内電車に乗った。ぼんやり向い側の車窓から見える動く景色を見ていた。しばらく乗ってある停留所まで来ると、そこで降りた。ひどく年寄りじみた動作であった。(点と線: 33-34)

- b. While this conversation was taking place, Detective Torigai quietly left the room. Taking his old hat, he went out on tiptoe so as not to disturb anyone. Outside, he boarded a streetcar and sat down. He looked absentmindedly at the passing scenery through the window across the aisle. When the car reached a certain stop, he got off. His movemnets were as careful as those of an old man. (Points and Lines: 26)

一方、日本語の小説の地の文には、過去形（タ形・テイタ形）と非過去形（ル形・テイル形）が混在し、これは英語と比べたとき際立って目を引く特徴である。作中世界の描写についていえば、日本語では、作中の具体的な事態についても頻繁に非過去形が用られるが³⁾、対照的に、英語では一貫して過去形のみで語られるという印象がある。

(2) a. 間違いない。彼女だった。

髪型が少し変わった。パーマをかけたか。耳のすぐ下で切りそろえた髪の下に、きらきら光るイヤリングが見え隠れしている。すらりとのびた足を優雅に動かし、テーブルの間を擦り抜けて、ウェイターたちの視線にも臆することなく、姿勢も美しい。

足を止め、ちょっと周囲を見回す。これだけ距離があっても、形のいい鼻梁を、つんとすまし気味のくちびるを、さっとひとはけ紅をのせた白い頬を、よく見ることができる。(火車: 579-580)

b. There could be no mistake. It was her.

Her hairstyle was different. Earrings flashed beneath shoulder-length waves of hair. She rode forward on long legs, brushing between the tables, neither avoiding the waiters' looks nor trying to play down her own height.

She stopped and looked around. Even from this distance, Honma could appreciate her looks : the delicate nose, the slightly pursed lips, the hint of rose blush on her pale cheeks. (All she was worth : 295)

さらに、(3a)のようないわゆる自由間接話法部分については、日本語では過去形を用いて再現することはできそうにない（拙訳(3b)を参照）。

(3) a. She heard footsteps now, soft across the living room rug. What a fool she'd been. She'd let him in, made it easy for him. Why, he wouldn't even have to drag her body to the trunk. She was standing right beside it. [...]

She was going to be murdered! Would he bury the trunk? She and Anita Low together in the same grave! Why couldn't she scream? (Contents-One Body : 26)

- b. もう足音が聞えてきた。ゆっくりと居間を横切っていく。なんて馬鹿だったんだらう。こっちが招き入れて、仕事をしやすくしてやったようなものだわ。死体をトランクまでひきずっていく必要もないじゃない。こうしてすぐ脇に立ってるんだから。[…]

殺されてしまう！トランクは埋めるんだらうか。私とアニータ・ロウと一緒に同じ墓に！どうして悲鳴が出てこないんだらう？

このような対応関係のばらつきは、どこから生じるのだろうか。もちろん英語と日本語とでは、比較にならないほど異なる文法形式も多いのだが、こと時制形式に関しては、両者とも形態的には「過去形」「非過去形」の二つのグループからなるシステムをもち、それぞれの過去形どうし、非過去形どうしは、基本的には一貫して対応する。例えば「昨日」の出来事を表すのに、英語で **We meet him yesterday* と言えないように、日本語でも「*昨日私たちは彼に会う」とは言えず、「明日」の予定を表すのに **We met him tomorrow* と言えないように、「*明日私たちは彼に会った」と言うこともできない。小説の地の文では、この対応関係が成立しないのである。

本稿では、小説の地の文でのこうした対応関係のばらつきが、時制の使用を規定する中核的な特徴、すなわち「発話時基準」あるいは「発話者視点」という特徴のステイタスの違いから生じるものと考えられる。例えば Declerck (1990 : 514) は、“English speakers views a situation as either past or non-past with respect to the moment of speech” (下線部は筆者) と一般化しているが、英語ではこれが“常に”成立するのに対し、日本語では、文脈上の他の時点も基準にすることができる (またそうするしかないこともある)。英語では、「発話時」または「発話者」が時制選択の要になるのに対し、日本語にとって「発話時」は「可能な参照点の一つ」にすぎないのである⁴⁾。

以下では、まず、英語と日本語の時制使用にこの点での違いがあることを、間接話法の従属節内での時制使用について確認した上で、その違いが、小説

の地の文での時制使用にどのように影響するかを見ていく。特に英語の非過去形の使用にかかる制約と、日本語では表現しわけることのできない、過去形／非過去形の使い分けに注目して考察する。

2. 従属節における非過去形

英語と日本語では、非過去形の主節での用法はかなり似かよっている。特に、〈状態〉や〈一般的陳述〉は、英語、日本語ともに非過去形の使用領域である。

<発話時点を含む期間に成立している状態>

I have a headache and fever.	頭も痛いし、熱もある。
He lives with his parents.	彼は両親と暮らしている。

<発話時点を含む期間に認められる個別的主体の特性>

He's big but still not fat.	彼は大柄だがまだ太ってはいない。
He states the obvious in a grave manner.	彼は分かりきった事を勿体ぶって言う。

<発話時点を含む期間に習慣的に行われる行為>

The committee meets each Monday at 2:00 p.m.	委員会は毎週月曜午後2時に開かれる。
We take the children to my mother's on Fridays.	金曜日は母の家に子供たちを連れて行く。

<特定の時にしばられずに認められる一般的主体の特性>

Asbestos doesn't burn.	アスベストは燃えない。
Now and then, everybody wants to be someone else.	誰でも別人になりたいと思うことがある。

これに対し、従属節内での非過去形の振る舞いは、両言語で全く異なる。ここでは間接話法のみをとりあげる。まず、英語では、主節動詞が過去形で

ある場合、引用された元の発話中の非過去形は、従属節内では〈時制の一致〉に従って、(4b)(5b)のように過去形になるのが普通である。

- (4) a. (John said,) 'I loathe cricket.'
 b. John said that he loathed cricket.
- (5) a. (Everyone thought,) 'He's being a fool.'
 b. Everyone thought he was being a fool. (Leech 1994 : 106)

say をはじめとする一部の動詞群については、従属節内での時制の一致は随意的になるが、〈不一致〉が許容されるのは、従属節内で述べられた事態が現在でも成立している場合に限られる。例えば、(6a)は格言として現在でも通用しているので、(6b)のように非過去形のまま引用することができるが、(7a)はソクラテスの存命中にのみ成立する事態であるため、(7b)のように現在形のまま引用することはできない。

- (6) a. (Socrates said,) 'Virtue is knowledge.'
 b. Socrates said that virtue is knowledge.
 c. Socrates said that virtue was knowledge.
- (7) a. (Socrates said,) 'I am blameless.'
 b. *Socrates said that he is blameless.
 c. Socrates said that he was blameless. (Leech 1994: 106-107)

(6b)(6c)はともに文法的に可能な文であるが、(6b)には、ソクラテスの言葉が今も妥当であるという現話者の意見が含意される。このような含みは(6c)にはない。こうした現話者の見方が、従属節内の時制の選択を左右するという点が、英語の重要な特徴である。(8a)(8b)の文脈の違いから分かるように、現話者が、従属節中の事態を過去の一部として伝えようとしているか、現在の状況の一部として伝えようとしているかによって、ふさわしい時制が異なる

のである。

- (8a)a. Jane said that her ex-husband was a pathological gambler and that's why she divorced him.
- b. Jane said that her ex-husband is a pathological gambler and she really worries when he has the kids. (Riddle 1986 : 276-278)

このように、従属節における英語の時制使用においては、発話者の視点から、発話者の〈いま・ここ〉と、そうでない世界が区別され、非過去形は、つねに発話者の〈いま・ここ〉との関わりを含意する。

日本語の時制は、これとは対照的に、間接話法の従属節中では、主節時に対して〈相対的に〉用いられる。非過去形は、主節の事態からみて〈同時または以後〉の事態、過去形は主節の事態からみて〈以前〉の事態を表現する⁵⁾。したがって、引用元の発言者が故人であろうとなかろうと、(9a)を引用するならば、(9b)のように従属節内は非過去形のままにするしかない。また、発話者がその妥当性についてどう思っていようとも、(10a)を引用するならば、(10b)のように時制は元の発言のままにするしかない⁶⁾。

- (9) a. 「私は潔白だ」(と、ソクラテスは言った。)
- b. 私は潔白だとソクラテスは言った。 [= (9a)]
- c. 私は潔白だったとソクラテスは言った。 [≠ (9a)]
- (10)a. 「地球は太陽の周りを回っている」(と、コペルニクスは言った。)
- b. 地球は太陽の周りを回っているとコペルニクスは言った。 [= (10a)]
- c. 地球は太陽の周りを回っていたとコペルニクスは言った。 [≠ (10a)]

(10a) を英語で表現すれば、*Copernicus said the earth revolved around the sun*のように過去形を用いることになるだろう。「地球が太陽の周りを回っている」という陳述が、現在では妥当ではなくなっているからである。このよ

うな非過去形使用にかかる制約は、日本語の時制選択には関与しない。また、英語では〈時制の一致〉に従うか従わないかによって意味の違いが生じるが、日本語では、その差を時制の違いで表現し分けることはできない。

以上をまとめれば、間接話法の従属節内における英語と日本語の時制の違いを、次のように特徴づけることができる：英語では、引用内容と、発話者の〈いま・ここ〉との関わりの有無がつねに区別されるのに対し、日本語では、引用された元の発話者の〈いま・ここ〉がそのまま保持される。

3. 語り手の視点と作中人物の視点

前節では、主節に過去形が用いられている間接話法をとりあげ、英語と日本語の時制使用を比較した。日本語では、主節時と同時であるかそれ以前であるかによって、従属節内の時制が決まるのに対し、英語では、発話者の〈いま・ここ〉との関わりの有無が、従属節内の時制選択の決め手になる。この節では、小説の地の文における時制選択にも、これと同種のメカニズムが働いていることを見ていく。

言うまでもなく、小説の場合は、作者の現実の〈いま・ここ〉は問題にはならない。重要なのは、「虚構上の語り手が、すでに起こった出来事を、虚構上の対話相手に伝える」という様式である。この点については日本語も同様なのだが、英語の小説では、語り手の〈いま・ここ〉—虚構上の発話時点—との関わりを含意するかどうか、時制選択の決め手になる。こうして、小説の地の文における非過去形の使用には、間接話法の従属節の場合と同様の制約がかかることになり、その点が、日本語の小説における時制選択との大きな違いにつながるのである。

3.1. 状態・特性・習慣・総称

2節で確認したように、発話時点を含む期間における〈状態〉や〈個別的主体の特性〉、〈習慣的行為〉、そして、特定の時にしばられない〈一般的主体の特性〉を表現するには、日本語でも英語でも非過去形を用いる。

「すでに起こった出来事」として語られる小説内の世界に関しては、このような意味を表現するために非過去形が使えるかどうかは、日本語と英語で対照的である。例えば、(11)は、看護学生が朝の6時すぎに起きるところから始まる場面の続きであるが、英語版(11a)では彼女が属する全寮制の看護学校での〈習慣〉を描写する二つの文で過去形が用いられている (*were called / set*)。これに対し、翻訳版(11b)ではこのうち一つが非過去形になっている(「起こすことになっている」)ことから分かるように、日本語では、小説の世界の中の〈習慣〉を非過去形で表現することもできる。

(11)a. She lay for a few moments contemplating this gratifying programme then she got out of bed, shuffled her feet into her slippers, struggled into her cheap dresisng-gown and made her way along the passage to the students' utility room.

The Nightingale nurses were called promptly at seven each morning by one of the maids, but most students, accustomed to early waking when on the wards, set their alarm clocks at 6.30 to give themselves time for tea-making and gossip. (The Shroud for Nightingale : 43)

b. しばらく横たわったまま、こうした満足のゆく授業をよくよく考えてみてから、彼女はベッドから出てスリッパを突っかけ、安物のガウンにやっと腕を通して、学生たちの便利室のほうへ向かった。

ナイチンゲール・ハウスでは毎朝七時きっかりに、メイドが看護婦たちを起こすことになっている。しかしたいていの学生は、病棟にいる間に早く目をさますことに慣れてしまっていて、お茶を沸かしたり噂話を交わしたりする時間にあてため、目覚ましを六時半に合わせていた。(ナイチンゲールの屍衣:74)

日本語では、〈習慣〉だけでなく、(12a)のように、場合によっては小説内の特定の時点での〈状態〉を表現する場合にも、非過去形を用いることができる。英語ではこの意味で非過去形を用いることはできず、(12b)のように過去形を用いることになる。

(12)a. 本間はそれを手にとった。

4判の用紙である。ワープロで、縦書きの文面が綴られていた。(火車:33)

b. Honma unfolded it. It was a single-spaced document on legal-sized paper, done on a word processor. (All She Was Worth: 21)

(13)でも、同様に、三原の〈習慣〉を描写する「乗る」「思案する」だけでなく、三原が乗った時点における〈状態〉の描写にも、「すいている」「ある」というふうに非過去形が用いられている。

(13) 三原は警視庁前から新宿行の都電に乗った。

夜の八時をまわって、ラッシュアワーは過ぎていた。車内はすいている。彼はゆっくりと腰かけ、腕を組んだ。背中にころよい動揺がある。

三原は都電に乗るのが好きだった。べつに行先を決めないうで乗る。行先を決めないというのは妙だが、何か考えに行きづまったときには、ほんやり電車ですわって思案する。(点と線:153)

このように、日本語では、「過去の出来事」として語られる小説であっても、小説内の世界に視点を据えて非過去形を〈相対的〉に用いることができる。ここでの非過去形の働きは、間接話法の従属節内にみられる〈相対化〉と同様のメカニズムに従っていると言える。従属節内との違いは〈相対化〉が随意的であるという点だが、選択の決め手となるさらなる要因についてはここでは立ち入らない。

これに対し、このような〈相対化〉が起こらない英語では、当然、非過去形の使用に対する制約がきつくなる。例えば、(13)を翻訳した英語版(14)では、逐語的ではないものの、三原が乗った時点における〈状態〉はもちろん、三原の〈習慣〉もすべて過去形が用いられている。

(14) Mihara took the streetcar to Shinjuku from in front of the metropolitan Police Board. It was past eight o'clock and the evening rush hour was over. The streetcar was almost empty. He was able to sit comfortably and cross his legs. The rocking motion of the car was not unpleasant.

Mihara was fond of streetcars. Strange as it may seem, he liked to board one of them just for the ride, without a set destination in mind. And when some problem arose to trouble him, he often chose to sit in a streetcar while he gave it thought. (Points and Lines: 106)

また、英語では、(15)の太字部分のように、時間にしばられない〈一般的陳述〉であっても過去形が用いられることがある点に注目されたい。

(15)a. "It would be," thought Miss Beale. **Whenever there was a crisis in the hospital the first people to be sacrificed were the student nurses.** Their training programme could always be interrupted. It was a sore point with her, but now was hardly the time to protest. She made a vaguely acquiescent noise. (Shroud for a Nightingale : 14)

b. 「そうでしょうとも」病院が危機に直面した時、まず犠牲になるのはいつも看護学生なのだ。彼女たちの授業計画は常に妨げられ得る。それはきわめて腹立たしいことであったが、いまはとても抗議などしているときではない。彼女はあいまいな黙認ともとれるつぶやきをもらした。(ナイチンゲールの屍衣 : 26)

しかし、制約があるとはいえ、英語の小説で、こうした意味で非過去形を用いること自体が不可能というわけではない。非過去形を使えるかどうかの決め手は、語り手の〈いま・ここ〉、すなわち〈虚構上の発話時点〉との関わりを

含意するかどうかであり、それが可能な設定であれば、非過去形を選択することもできる。

このことを確認するために、本稿の考察対象である3人称小説から、しばし1人称小説に目を移すことにする。3人称小説と比べると、1人称小説では、特に〈習慣〉を表す非過去形を目にすることが多い。1人称小説であっても、小説内のある時点と結びついた具体的・個別的な〈状態〉については、語り手の〈いま・ここ〉とは重なりようがないため、非過去形を選択する余地はない。しかし、3人称小説とは異なり、1人称小説では、「語り手が自分の属する世界での出来事を伝えている」という虚構が成立する。そのため、語り手(=主人公)が関わりをもつ状況についてであれば、会話の場合と同じように非過去形を用いることができると考えられる。例えば、(16)では、語り手(身柄拘束人)の仕事についての説明部分に、(17)では、語り手(弁護士)の同僚に対する評価やその人物の特性描写部分に、そして(18)では、語り手(検視官)の仕事場付近の情景を描写する部分に非過去形が用いられている(該当箇所を太字で示す)。

- (16) **As a bail bondsman Vinnie gives the court a cash bond as a securement that the accused will return for trial. If the accused takes a hike, Vinnie forfeits his money. Since this isn't an appealing prospect to Vinnie, he sends me out to find the accused and drag him back into the system. My fee is 10 percent of the bond, and I only collect it if I'm successful.**

I flipped the folder open and the bond agreement. [...] The bond amount was seven hundred dollars. That meant I'd get seventy. (High Five : 2-3)

- (17) **'Mack,' sid Martin Gold, our managing partner, 'Mack, we need your help. Something serious. He's a sizable man, Martin, a wrestler at the U three decades ago, a middle-weight with a chest broad as the map of America. He has a dark, shrewd face, a little like those Mongol warriors of Genghis Khan's, and the venerable look of somebody who's mixed it up with life. He is, no question, the best lawyer I know.** (Pleading Guilty : 5)

- (18) The white clock face floated like a full moon in the dark sky, rising high above

the old domed train station, the railroad tracks and the I-95 overpass. The great clock's filigree hands stopped when the last passenger train did many years before. It was twelve-seventeen. It would always be twelve-seventeen in the city's lower end where Health and Human services decided to erect its hospital for the dead.

Time has stopped here. Buildings are boarded up and torn down. Traffic and freight trains perpetually rumble and roar like a distant discontented sea. The earth is a poisoned shore of weed-patched raw dirt littered with debris where nothing grows and there are no lights after dark. (Postmortem : 16)

手元の資料および記憶の範囲でという注釈つきではあるが、3人称小説では、上で見たような〈習慣〉を表す非過去形の例は少なくともまれである。1人称小説と3人称小説とで、時制選択にこのような違いが生じるとすれば、それは、1人称小説とは異なり、3人称小説の語り手は、自分の属する世界とは別の世界の出来事を語る立場にあるからだと考えられる。3人称小説では、語り手の〈いま・ここ〉は、作中の世界の外（語り手と読み手ともに属する世界）にあり、したがって、非過去形を用いる可能性が出てくるのは作中世界の外でも通用しうる事柄、すなわち、〈総称的〉あるいは〈一般的〉な陳述の場合ということになる。

(19)と(20)は、背景的な情報を与えるための〈一般的陳述〉の部分に非過去形が用いられている例である。二例とも、波線部の表現によって語り手が表にでてきている例でもある。

(19) **There are certin things people always want to know about twins, the more so in mystery stories. I can reassure the wary reader that Oyster and Pearl were not identical [...].** (The Crime of Miss Oyster Brown : 52)

(20) **In a hospital, time itself is documented, seconds measured in a pulse beat, the drip of blood or plasma ; minutes in the stopping of a heart ;**

hours in the rise and fall of a temperature chart, the length of an operation. When the events of the night of 28th-29th January came to be documented there were few of the protagonists at the Jon Carpendar Hospital who were unaware what they had been doing or where they were at any particular moment of their waking hours. (Shroud for a Nightingale : 37)

次に、(21a)とそれを英語に翻訳した(21b)を見比べてみる。日本語では〈一般性〉の度合いに差があるようには感じない、二つの非過去形による表現が、英語では非過去形と過去形とに区別して表現されている点に注目されたい。この区別の基準は明確であり、非過去形が用いられているのは、語り手の〈いま・ここ〉にも通用しうる内容（太字部分）であり、過去形が用いられているのは、作中人物（本間）の経験に結び付けられる内容である。

(21)a. 東北新幹線を利用すれば、東京駅から宇都宮まで一時間以内で行くことができる。乗り換え電車の連絡の悪い時間帯だと、本間の家のある常磐線の金町から、山手線の新宿駅へ出て行くのに、それと同じくらいの時間がかかることもあるのだから、便利になったものだ。(火車:252-253)

b. The New Tohoku Line bullet train from Tokyo Station gets to Utsunomiya in under an hour – just about the same amount of time it took to get to the center of Tokyo from the suburb where Honma lived, during the off hours when connections were slowest. (All She Was Worth: 138-139)

かなり一般性の高い文についても、同様の区別がなされる。(22)と(23)は、本来は連続する一節である。太字で示した部分は、どちらにおいてもかなり一般性の高い内容に見えるが、(23)では過去形が用いられている。違いがあるとすれば、ガラスという物質について説明している(22)に対し、(23)では鑑識用の装置の機能が説明されているという点だろう。そうした装置の操作が、犯罪科学鑑識のプロである作中人物たちにとって日常的に経験している事態

であることを考えれば、ここで過去形が用いられているのは、作中人物の経験にひきよせて表現するためだと考えることができる。(22)と(23)における時制の使い分けは、(21b)での時制の使い分けと同種のものだと言える。ここで確認しておけば、日本語版(21a)(22a)からわかるように、日本語では非過去形で表現するしかなく、特に動詞述語の場合、可能なのはル形のみで、テイル形も用いることができない⁷⁾。

(22)a. “Ground glass?” Rhyme suggested.

Glass is essentially melted sand but the glassmaking process alters the crystalline structure. You don't get birefringence with ground glass. Cooper examined the sample closely. (The Bone Collector : 80)

b. 「砕いたガラスか？」ライムは思いつきを口にした。

本来、ガラスは砂が融解したものだが、製造過程で結晶の構造が部分的に変化する。粉ガラスに複屈折はない。クーパーはサンプルを注意深く観察した。(ボン・コレクター：127-128)

(23)a. “No, I don't think it's glass. I don't know what it is. I wish I had an EDX here.”

A popular crime lab tool was a scanning electron microscope married to an energy-dispersive X-ray unit; it determined what elements were in trace samples found at crime scenes.

“Get him one,” Rhyme ordered Sellitto, then looked around the room. “We need more equipment. I want a vacuum metal fingerprint unit too. And a GC-MS.” **A gas chromatograph broke down substances into their component elements, and mass photospectrometry used light to identify each one of them. [...]**

Sellitto phoned the wish list to the CSU lab. (同上：80)

b. 「違う。これはガラスじゃない。だが、何だかわからないな。EDXがあればいいんだが」

科学捜査研究所ならどこでも備えている検査機器の一つが、走査型電子顕微鏡とEDX（エネルギー分散型X線分析器）が合体したものだ。これを使えば、現場から採取した微細証拠物件に含まれる元素を識別できる。

「手配してやってくれ」ライムはセリッターに指示し、それから部屋を見まわした。「もっと器具が必要だ。VMD（真空蒸着）装置も欲しい。GC-MSも」GCすなわちガスクロマトグラフは試料を各成分に分画し、MSすなわち質量分析計は電磁氣的相互作用を利用して、原子・分子のイオンを質量の違いによって分析する。[…]

セリッターが電話をかけ、ライムの“おねだりリスト”を鑑識課研究室に伝えた。(同上：128)

ここで、3人称小説での〈状態〉や〈習慣〉の表現、そして〈一般的陳述〉に用いられる時制についてまとめておこう。作中世界の〈状態〉や〈習慣〉については、日本語では文脈中の可能な時点に視点をおくことができるため、作中人物の立場から、その人物に見えているもの、経験していることとして非過去形で表すか、語り手の立場から、すでに起こったこととして過去形で表すか、そのどちらの選択肢も可能である。これに対し、英語では、常に、語り手の〈いま・ここ〉との関わりで時制が決まるため、作中人物の立場から、その人物が見ている状態や経験している習慣として表すには、過去形が用いられることになる。

一方、〈一般的陳述〉については、日本語では非過去形を用いるしかない。日本語の過去形は、語り手、作中人物のどちらの視点からの陳述にも使えるが、どちらに視点をおくにしろ、「その時点ですでに終わった」（具体的な事態を伝えるからである。これに対し、英語の過去形は、「語り手の〈いま・ここ〉とは異なる」世界の事態であることを表示するものなので、〈一般的陳述〉であっても、作中人物の経験に由来するものとして伝える場合には過去形を用いることができる。

3.2. 作中人物との距離感

前節でみたように、英語では、日本語とは違い、作中人物がその場で知覚した〈状態〉を、直接「見たまま」に再現することはできないものの、その一方で、語り手による〈一般化〉と作中人物に由来する〈一般化〉とを時制の違いで区別することができる。両言語にみられる時制選択でのこうした違いは、英語では、「語り手の〈いま・ここ〉との関わり」が常に選択の主要因として働いていることによる。

この節では、作中人物の内的意識の描写における時制選択をみていくが、ここでも、作中の時点に視点を移せる日本語と、語り手の〈いま・ここ〉と作中世界とを常に区別する英語という違いが、選択される時制の違いに反映される。ここでは特に、その効果の違いに注目する。

まず、本節の対象となる形式を確認しておこう。Leech & Short (1981 : 337)は、作中人物が心の中で言語化した内容を表現する手段を(24)のように分類しているが、ここでとりあげるのは、(24a)(24c)に太字で示した、FDT (自由直接話法)とFIT (自由間接話法)である⁸⁾。また、Leech & Shortでは、*Does she still love me? he thought*のように、思考動詞がタグとして文頭、文中、文末に現れている文を“free”の範疇に分類しているが、ここでもその分類に従うことにする。

- | | |
|---|-------------------------------------|
| (24)a. Does she still love me? | (Free Direct Thought: FDT) |
| b. He wondered, 'Does she still love me?' | (Direct Thought: DT) |
| c. Did she still love him? | (Free Indirect Thought: FIT) |
| d. He wondered if she still loved him. | (Indirect Thought: IT) |

このような表現形式と比べたとき、日本語に特徴的な点は、一つには、直接話法(DT)と間接話法(IT)の差が小さいこと (2節を参照)、そして、形態的に自由間接話法(FIT)に相当する表現がないことである。比較のために、時制と代

名詞をそのまま日本語に置き換えたものが(25a)(25b)(25c)(25d)である。

- (25)a. 彼女はまだ僕を愛しているだろうか。
 b. 「彼女はまだほくを愛しているだろうか」と彼は思った。
 c. 彼女はまだ彼を愛していただけるか。 [≠24c]
 c'. 彼女はまだほくを愛しているだろうか。
 d. 彼女はまだ彼を愛していただけるか、と彼は思った。 [≠24d]
 d'. 彼女はまだほくを愛しているだろうか、と彼は思った。

(25c)(25d)は、(24)とは意味が異なる。意味的に等価にしようと思えば、(25c')(25d')のように時制（と代名詞）を変更する必要がある。DT (25b)とIT (25d')の違いは引用符の有無だけになる。また、(25c')は、(25a)と同じ形になる。このように、少なくとも英語のように時制と代名詞で区別されるFDTとFITの違いは、日本語にはない⁹⁾。

日英比較という観点からここで問題になるのは、英語のFDTとFITの違いである。両者に違いがあるとすれば、どちらの方が日本語のFDTに近いのだろうか。ここまで確認してきた日英の違い—作中の時点に視点を移せる日本語と、語り手の〈いま・ここ〉と作中世界とを常に区別する英語という違い—をふまえれば、「作中人物の視点からの描写」は、英語では過去形の領域になるはずである。ここでの見方に一致するものとして、Declerck (1990)によるFITでの過去時制使用についての説明をあげておく（下線は筆者）¹⁰⁾。

As is well-known, the speaker may assume the temporal standpoint of a participant in a past situation in order to suggest that the situation is expressed from his point of view. This means that he relates the situations to a particular past time (the time rather than to his own here-and-now). The past time-sphere tenses in free indirect speech are thus explained as tenses that are bound by the past time that the speaker is focusing on. (Declerck 1990 : 538)

作中人物の視点からその思考内容を表現するさい、日本語では、FDTで直接的に再現するが、英語でこれに相当する手法は、「作中人物の視点に立っていることを明示」しながら、できるだけ元の形に近い姿に（疑問文は疑問文のまま、間投詞などもそのまま）再現するFITだと言えそうである¹¹⁾。

では、英語のFDTはどのような役割を果たすのだろうか¹²⁾。すでに指摘したように、日本語では、時制（および代名詞）の面ではFDTといえる形しかない。したがって、(26)のように、英語におけるFDTとFITを日本語に翻訳したものからは、その違いは見えにくい。

- (26)a. “There're about eight thousand varieties of deciduous vegetation in Manhattan,” he explained. “Not very helpful. What's underneath the leaf?”

Why does he think there's anything there?

But there was. A scrap of newsprint. Blank on one side, the other was printed with a drawing of the phases of the moon. […]

“Is it like all the rest of the dirt around there?”

“Yes.” Then she looked closely. Hell, it was different. “Well, not exactly. It's a different color.”

Was he always right? (The Bone Collector : 192)

- b. 「マンハッタンの落葉植物はおよそ八千種だ。大いに参考になる手がかりとは言えないな。葉の下には？」

なぜまだ何かあると思うのだろうか？

しかし、ライムの言うとおりに、それで終わりではなかった。新聞用紙の切れ端があった。片面は白紙だが、反対側には月の満ち欠けが描かれている。[…]

「周辺の土と変わらないか？」

「変わりません」そう答えたものの、なおもよく観察してみた。おや、違っている。「いえ、全く同じじゃないわ。色が違います」

彼が間違えることは絶対にはないのだろうか。 (ボーン・コレクター : 315-316)

コーパスを利用し、英語の話法を体系的に記述・分析した研究として、Leech & Short (1981), Semino & Leech (2004) があるが、彼らによれば、FDT (およびその他の話法) と比較したときのFITの特徴は「作中人物の内的意識に、自然な形で接近できる」ことである (下線は筆者) :

Its [FIT's] appeal for writers primarily lies in its flexibility in terms of formal features and its usefulness in presenting thoughts in a dramatic and immediate way, but without the more obvious artificiality of (F)DT. (Semino & Leech 2004 : 123)

逆に言うと、日本語のFDTとは違い、英語のFDTの使用には、「不自然に接近」しすぎることによる人工性・技巧性がつきまとうことになる。Semino & Leechによれば「芝居の独白を思わせる」手法であり、感情の高まりなどに多く用いられるという(2004 : 118)。

さらに、Leech & Short (1981)には、興味深い用いられ方として、(27)のような例があげられている。

(27) a. 'I'll kill him though,' he said. 'In all his greatness and his glory.'

Although it is unjust, he thought. But I will show him what a man can do and what a man endures.

b. 'Don't think, old man,' he said aloud. 'Sail on this course and take it when it comes.'

But I must think, he thought. Because it is all I have left . . . (*The Old Man and the Sea*, Leech & Short, p.347に引用)

この例は、FDTとDS (=Direct Speech) の対比によって、いわば「同一人物の二面性」を効果的に表現するものとして説明されている :

In these extracts the old man's immediate reactions to the world around him are portrayed through DS. But FDT is used to show the more reflective side of his nature. It is almost as if the reflective, more philosophical, side of the old man carries on a dialogue with the physical, instinctual half, keeping it in check. In this way Hemingway dramatizes the elemental struggle in the old man's nature in this story of privation, courage and endurance. (Leech & Short : 348)

こうした記述を念頭において見直すと、手元の資料に見られるFDTについても、同様の効果が生じているとみなせる例が見つかる。同一作品から、FITの例(28a)とFDTの例(29b)をあげておこう。(28a)では、一つの会話を受けて、その延長として生じたRhymeの思考にFITが使われている。これに対し、(29a)では、Rhymeは、一方で旧知のLon Sellittoに同行したBanksとの会話を交わしながら、このやりとりに加わっていないLonの反応や行為の方に注意を向けており、この、いわば「もう一人の自分」とでも言えそうな思考の部分にFDTが用いられている。

(28)a. Rhyme repeated. "Who is it?"

"Lon Sellitto."

"Lon?"

What was he doing here?

Thom examined the room. "The place is a mess." (The Bone Collector: 26)

b. ライムは繰り返した。「誰が来た？」

「ロン・セリットーです」

「ロンが？」

いったい何の用だろう。

トムは部屋をつくづく眺めた。「それにしてもまあひどい有様ですね」(ボン・コレクター : 34)

(29)a. "I didn't know you and Lon were friends," Banks added.

"Ah, Lon didn't trot out the yearbook? Show you the pictures? Strip his

sleeve and show his scars and say these wounds I had with Lincoln Rhyme?"

Sellitto wasn't smiling. Well, I can give him even less to smile about if he likes. The senior detective was digging through his attaché case. And what does he have in there?

"How long were you partnered?" Banks asked, making conversation. (The Bone Collector : 32)

- b. 「ロンとあなたがパートナーだったとは知らなかった」バンクスがつけくわえた。
「ほう、ロンは卒業記念アルバムをみせびらかさなかったかね？写真を見せなかったかい？袖をまくりあげて傷痕をみせつけ、リンカーン・ライムと捜査中に負傷したと吹聴したりはしなかったか？」

セリットーはにこりともしなかった。ふん、そっちがその気なら、こっちだって金輪際、軽口など叩いてやらんぞ。ベテラン刑事はアタッシュケースをごそごそとかきまわしている。いったい何を持ってきた？

「お二人はどのくらいパートナーを組んでいたんですか？」バンクスが会話を途切れさせまいとして訊く。(ボーン・コレクター : 44)

この違いを認めたくえで、先の(26a)を見直せば、(28)と(29)の場合ほど明瞭ではないかもしれないが、FDTが用いられているのはRhymeの指示に従って現場検証をすすめつつも、内心ではその指示を疑問視している部分でありFITが用いられているのは、「調べる→(違う)と気づく→『違う』と報告する→言ったとおりだと感心する」という一つの流れに組み込まれた思考の部分であるという違いを指摘することができる。

さらに、次のような、作中人物の記憶や想像の中での他者の言葉に用いられるFDTの用法も、(26)~(29)に類するものとみなすことができる。(30)(31)は、日本語の作品を翻訳したものだが、特に(31)の日英の表現を比べると、人工性・技巧性という特質のために特殊な効果を生む英語のFDTが、形態的には一見対応している日本語のFDTとは、全く異なる役割を果たしていることが確認できるだろう。

- (30)a. Funny, if this all turned to snow and blanketed the dingy streets, it would only look warmer. That's just what you Tokyo folks think, Chizuko had once told him. You don't know real snow. Still, whenever the gray city streets turned white, Honma couldn't help thinking so. (All She Was Worth : 8)
- b. 面白いもので、これが雪になってしまうと、薄汚れた町並みが、白い綿にくるまれて、かえって暖かそうに見えたりする。そういう感覚は、本物の雪の怖さを知らない関東人だけのものだと、昔、千鶴子に笑われたことがあったが、本間にはどうしてもそう思える。今でも、雪が積もるほどに降れば、やっぱり、そう感じるだろう。(火車:7)
- (31)a. At Kameari station a few more passengers got on. As a tight formation of five middle-aged women rammed past, Honma tried to move aside while keeping the weight off his left leg. Without thinking, he let out a groan. The high school girls glanced at him. That guy's creepy . . . (All She Was Worth : 8)
- b. 亀有の駅に着くと、数人の乗客が乗り込んできた。四、五人連れの中年の婦人客が、本間の傍らを、固まってどやどやと通り過ぎてゆく。ぶつからないようにと少し身体の向きを変えた。だが、それだけのために、傘を杖代わりに突っ張って、左足に体重がかからないようにしたとき、自分では意識しないうちに唸っていたらしい。話に興じていた女子高生たちが、ちらりところらに目をやった。(あのおじさん、ヘンね) とでも思われたのかもしれない。(火車:7)

FITとFDTの小説における効果には、常にここで見たような対照が見られると結論づけるには、より網羅的なコーパスにもとづいた調査が必要である。ここでは、「作中人物の視点にたった思考再現」を表現するのは英語ではFITの役割であり、FDTが特殊な効果のために使えるとすれば、FITとの対比があるからこそである、という一般化にとどめておくことにする。

日英での違いという観点からはまとめれば、作中人物の視点に自然に接近する表現は、英語では、「語り手の〈いま・ここ〉とは別の世界である」ことを過去形によって明示するFITであり、思考を直接再現するFDTは、英語では「不自然に近づきすぎている」という印象を与える（このために、「自然な」

FITとは違った効果のために用いることができる)。これに対し、日本語では、作中人物の思考内容は、(少なくとも時制選択については) その人物の視点から直接再現するFDTに近い形しかなく、日本語にとっては、これが最も自然な形ということになる。

4. おわりに

本稿では、日英の時制形式について考えられるさまざまな違いの中でも、特に「常に発話時を基準とする」か「可能な参照点の一つとして発話時を利用することもある」という基本的な違いが、両者の対応する時制形式の使用領域のずれにつながることをみた。

間接話法の従属節内の場合と同様、「すでに起こった出来事」として語られる小説の地の文においても、日本語は作中のどの時点も基準点として利用できるため、作中人物の視点に自由に移動することができる。これが日本語の小説における時制使用の特徴ではあるのだが、英語と比較してみると、一般的陳述については、どの視点に立とうと「その時点〈以前〉」を表す過去形は用いることができず、非過去形使用が義務的であり、また、作中人物の思考を再現するなら、その人物への視点の移動が義務的である。英語では、「語り手の〈いま・ここ〉」のための形式である非過去形の使用が、全体的に制限される分、日本語では非過去形が義務的になる場合でも、「語り手の視点」から見ているのか、「作中人物の視点」から見ているのかを時制の違いで区別することができる。

小説における、このような時制形式の役割分担の違いが、時制の意味の基本的な部分と関わっているという全体像は示すことができたと思う。ただし、英語の1人称小説と3人称小説において、習慣表現などに用いられる非過去形の使用頻度に上で論じたような差がみられるのか、また、英語の小説におい

てFDTかFITかによって上で示唆したような効果の差が見られるのか、といった点についてはコーパスを整備した上での検証が必要である。また、日本語の小説において、作中のある時点との同時性を表す場合、非過去形と過去形がどのように使い分けられているかについては、ここでは触れることができなかった。さらに、従属節内での時制選択と、小説の地の文における時制選択との間には、どの程度の相関があるのか、についても、例えば、日本語と同様に非SoT言語に分類できるロシア語などとの比較によって確かめるべきである。ここで示した議論を精緻なものにしていくために、これらを今後の課題としたい。

註

- 1) この点について、工藤(1995:168)はこう説明する:「われわれは、〈はなしあい〉に参加するときとは、異なる態度(スタンス)で、小説の読者(場合によっては作者)となる。ここでは、だれひとり、実在的に〈わたし〉とも〈いま〉とも言わず、実在的(現実的)発話行為の場との直接的関係ぬきに、発話の対照的世界が提示されるのである」。非過去形も混在する日本語の小説を説明しようとする場合には必須の了解事項であるが、ここまでは、英語の小説にも当てはまる特徴である。
- 2) Fleischman(1990:23-24)によれば、この様式以外では「narrateすることはできない」: “Narration is a verbal icon of experience viewed from a retrospective vantage; the experience is by definition “past,” whether it occurred in some real world or not. Hypothetical or future experiences are also commonly narrated as if they were past, for this, I submit, is the only way one can narrate. The tenses appropriate to the verbal activity of narrating are accordingly tenses that include past time reference as part of their basic meaning.” また、小説における「発話者=作者」と「語り手」の関係、そして「発話者-語り手-発話内容」間の関係などについてはLeech & Short(1981)やChafe(1994)の分析を参照のこと。
- 3) 特にル形に注目したのが山内(2000)である。そこでは、ル形の使用は、ある程度「文体的」特徴であり、作者ごとに使用頻度の違いも大きい、この形が使用される場合の特徴や効果の面では一貫性があることを指摘している。また、小説における日本語の時制使用を体系的に分析したものとしては、工藤(1995)があげられる。
- 4) この見方は、「SoT言語」(従属節内で“時制の一致(Sequence of Tense)”が起こるタイプ)か「非SoT言語」かで言語を大別し、それぞれの特徴を一般化しようとする対照研究においてしばしば依拠される見方でもある(Barentsen(1996), Hollebrandse(2005)などを参照)。また、日本語の時制使用における基準点の「流動性」「相対性」に関しては、工藤(1995)、鎌田(2000)、町田(1989)、三原(1992)、サイデンステッカー&安西(1983)など、様々な観点から記述、分析がなされている。

- 5) ここでの一般化はかなり単純化してある。実際には、述語自体のアスペクト的性質と時制形式との組み合わせで、相対的な時間的位置が決まってくる。文レベルでの分析については、寺村(1984)、町田(1989)、三原(1992)を参照されたい。
- 6) そもそも、日本語では直接話法と間接話法との差じたいが小さい(3.2節も参照)。むしろ、引用の「直接性」を表現しわけの上では、日本語は敬語・丁寧語を含めた口調の再現の度合いの方が重要になると思われるが、ここでは立ち入らない。日本語のさまざまな引用形式については、鎌田(2000)を参照のこと。
- 7) 一般的な陳述については、ル形が「ポテンシャル」な内容、テイルがより「アクチュアル」な内容(反復)を表すという違いがみられる(工藤1995:146-161)。
- 8) Leech & Short(1981)の分類には、実際にはNarrative Report of a Thought Act: NRTA (*He wondered about her love for him*)というもう一つの範疇が含まれている。また、かっこ内の日本語訳をあえて自由直接話法としたが、Leech & Short (1981) および Semino & Leech (2004) では、思考の再現形式である (Free) Direct / Indirect Thoughtと、発話の再現形式である (Free) Direct / Indirect Speechとを区別している。
- 9) ただし、日本語の場合は、述語の語尾によって「直接的再現」性の度合いを変えることができる。註6も参照。
- 10) Declerckの言う“free indirect speech”の一部が本稿でのFIT(Free Indirect Thought)に相当することになる。註8も参照。
- 11) 例えばLeech & Short(1981)では、*Raspberry Jam* (Wilson)におけるFITの使用を作中人物ごとに量的に調査し、登場人物への読者の共感を誘うためにFITが使えることを示している(Leech & Short 1981: 347)。
- 12) 作中世界の状態描写などについては、作中人物の視点からの「直接再現」ができないのに対し、思考内容に関してはこれが可能になるのはなぜか、という点についての明快な説明は今のところ用意できていない。

引用文献

- Barentsen, A. 1996. Shifting points of orientation in Modern Russian: Tense selection in 'reported perception'. In Janssen, Theo A.J.M. (ed). *Reported Speech*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp.15-55.
- Chafe, W. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Declerck, R. 1990. Sequence of tenses in English. *Folia Linguistica* 24: 513-544.
- Fleishman, S. 1990. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University of Texas Press.
- Hollebrandse, B. 2005. Sequence of Tense: New insights from cross-linguistic comparison. In Hollebrandse, B. & Co Vet. (eds). *Crosslinguistic Views on Tense, Aspect and Modality*. Amsterdam/New York: Rodopi. pp.49-59.
- 鎌田修. 2000. 『日本語の引用』東京: ひつじ書房
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京: ひつじ書房
- Leech, G. N. 1994. *Meaning and the English Verb*. 2nd Edition. Tokyo: Hitsuzi Shobo
- Leech, G.N and Short, M.H. 1981. *Style in fiction*. London/New York: Longman.
- 町田健. 1989. 『日本語の時制とアスペクト』東京: アルク
- 三原健一. 1992. 『時制解釈と統語現象』東京: くろしお出版

- Riddle, E. 1986. The meaning and discourse function of the past tense in English. *TESOL Quarterly*, 20-2: 267-286.
- サイデンステッカー, E.G. & 安西徹雄. 1983. 『日本文の翻訳』 東京: 大修館書店
- Semino, E. & Leech, G. N. 2004. *Corpus Stylistics*. London/New York: Routledge.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味II』 東京: くろしお出版
- 山内真理. 2000. 日本語の「語り」における完結相非過去形の役割. 『大阪薬科大学教養論叢・ぱいでいあ』 25: 99-133.

例文出典

- All She Was Worth*. Miyuki Miyabe. (tr) Alfred Birnbaum. Houghton Mifflin Company.
“Contents: One Body” C. B. Gilford. (*Hitchcock's Short Misteries*. Yukito Seta & Kazuya Okada. (eds.). Nan'un-Do.)
- High Five*. Janet Evanovich. St. Martin's Paperbacks.
- Pleading Guilty*. Scott Turow. Penguin Books.
- Points and Lines*. Seicho Matsumoto. (tr) Makiko Yamamoto & P. C. Blum. Kodansha International.
- Postmortem*. Patricia Cornwell. Warner Books.
- Shroud For Aa Nightingale*. P. D. James. Warner Books.
- “The Crime of Miss Oyster Brown.” Peter Lovesey. (*Master's Choice*. Lawrence Brock (ed.). Berkley Prime Crime.
- The Bone Collector*. Jeffery Deaver. Signet.
- 『火車』 宮部みゆき. 新潮社.
- 『点と線』 松本清張. 新潮社.
- 『ナイチンゲールの屍衣』 P. D.ジェイムズ. 隅田たけ子 (訳) 早川書房.
- 『ボーン・コレクター』 ジェフリー・ディーバー. 池田真紀子 (訳) 文芸春秋